

## 見立てと出雲流庭園

吉 田 薫

### はじめに

古典庭園といわれるものはそのほとんどが池泉式であり、王侯貴族や大寺院の広大な敷地に自然を模して山や池が作られた。山には樹木が植えられ、水際には護岸の石が立てられ、水面には島が作られた。自然の風景が庭園に写されたのである。平安時代の庭造りのテキスト「作庭記」にも自然の有様をよく観察するように書かれている。

室町時代になると、とかく制約の多い水を使わない「枯山水」の庭園が、禅寺などで多く作られるようになった。有名な「龍安寺の石庭」などもこの頃のものである。

「枯山水」とはつまり、白砂を敷くことにより海や池と見立てた形式である。これにより地形、水量、湿気などに制約されることなく作庭が可能となった。

本稿においては、枯山水の一形態である出雲流庭園における「見立て」について述べる。

### 自然の風景、山水画、庭園

理想的な風景を、庭園が植物や石などの自然材料を用いて模したものなら、山水画は絵画として表現したものである。すなわち、「自然の風景 山水画 庭園」の間には密接な関係があり、三者を比較すると、庭園における「見立て」が何に対しのどのように行われているかが明らかになるはずである。ただし、山水画、庭園とも、純然たる自然を表現したものではなく、かなり人為や創作が入っていることは知っておかねばならない。



図-1. 山水画「高松酔琴」の風景（韓国）

山水画「高松酔琴」を読み解く。川の上流に瀨(とろ)があり、そこは風光明媚なところで、松の生えた峨々たる岩山がそびえ、幾条もの滝が水面に注ぎ、さらに水面には川舟が浮かんでいる。近くの松は高く、遠くの岩山は霞む。ずっと遠方の奥まったところにも人家があり、舟で往来できる。山の尾根の平場は、景色を眺めるのにも宴を開くのにも都合がよい。宴に興じ、酔いに任せて琴をつま弾く。しばし画中の人となり、この風景を愉しむ。というところか。

この山水画の構成要素は、岩山、松、建物(苔屋)、滝、川、静水面、舟、道、人、道具類等であり、実景及び出雲流庭園と比較して見よう。なお、ここでいう実景とは想定上の自然の風景のことである。

表-1. 実景 - 山水画 - 出雲流庭園の関係

実景 (見立て)	山水画	出雲流庭園
岩山	誇張して描写	築山、巨石
樹木	松等	樹木
建物	苔屋、楼閣	燈籠？
山道	描写	飛び石？
橋	描写	短冊石？
滝	描写	枯滝
川	描写	白砂
静水面	描写	白砂
小島	描写	鶴島、亀島
岩礁	描写	飛び石？
舟	描写	舟石
人	描写	なし
生活用具	描写	蹲？
魚(不見)	描かず	鯉魚石
景物	景物	道標、橋脚

(注)？は筆者推定。 は日本庭園の範疇なるも今回調査では未確認。

が石を持参したというエピソードから「橋は？」という疑念が生じ、水面を模した白砂上を渡る短冊石に思い至った。一本橋でないのは八ツ橋の伝統を受け継ぐと解す。八ツ橋は中国杭州・西湖などで見られる直進しかできない悪魔封じのために多重に折れ曲げられた九曲橋とつながる。つまり魔除けである。

蹲を生活用具に見立てたのは、その実用性が生活感覚との接点であると考えたためである。

印を付した項目は、庭園では一般的だが今回の見学先で見られなかったものであり、他の出雲流庭園で確認できるかもしれない。これらはいずれも庭園にストーリーを付加するものであり、意識や思考をしばし引き止める役割がある。すなわち味わう間ができる。

ただし、このような仮説が適切かどうかは分からない。

## 自然と人工

山水画にしても庭園にしても、自然を写すことを主題に置きながら、なぜ人工物を取り入れるのであろうか。庭園の場合、飛び石として自然石が調達できないわけがないのにも関わらず、短冊石を含めて人工的な切石が用いられる。デザインとしての緊張感や面白さの外に、私は人工物を置くことによって、築山や植栽など人間が関与した自然の不自然さを目立たないようにするということや、天・地・人のバランスをとり安定感を狙ったものと解するが、読者諸賢においては異なった知見があるかもしれない。

以上、私見を述べたが、来年度以降も引き続き思案を重ねたいと考えている。

表-1により三者を比較すると、山水画は実景の各要素を描くものの、誇張や想像を取り入れ、自然よりも美しく印象的に表現しようとするものである。魚が描かれないのは、多くの場合、その必然性がないからであろう。

一方、庭園においては、岩山や樹木は、築山 - 巨石 - 樹木として表現される。白砂を敷いて水面、水際部に石を立てて護岸、巨石を組合わせて枯滝と見立てることは基本だが、「？」を付した項目は私の「見立て」である。

狭い空間で自然の事物を表現しようとするれば、表現にかなりの飛躍と割切りが必要である。普通規模の庭に苔屋を建てればスケール感が破綻するので形状の近い燈籠、山道はコケなどをいためないよう実用性を兼ねて飛び石、また水面を渡る岩礁の表現としても飛び石、岩礁間の離れが大きい場合は、橋に見立てた短冊石、道具類の象徴兼実用性として蹲(つくばい)。

このうち、短冊石を橋と見立てたのは、石橋家庭園の石の多さは石好きの主人のために他人